昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十三年三月十五日発行（毎月一回十五日発行）
（通第二二六号）

慈光

第二十巻　第三号

目次

仏世尊を除きて餘は能く救うこと無けん……近角常観…(1)
愛書と求道
近角先生著「親鸞聖人の信仰」②……福島政雄…(5)
一道会の記……榊原徳草…(9)
求道の扉……花田正夫…(16)
法味一束……聚墨生…(21)
ジャータカ物語……(23)

仏世尊を除きて餘は能く救うこと無けん

近角常観

此一語は、阿闍世王大煩悶に陥りたるとき、その父ビンバシャラ王が空中より我子に与えた訓誡である。実に味わい深き言葉である。千古動かざる真理である。此語は今や（大正五年）我国のいずれの方面に向っても、中心より親切を以て勧めたい言葉である。又かって此語を以て剴切に国家のために念じたこともあった。なお現に私自身がこの訓誡の事実であることを経験し来りたことである。

今や我国の何れの部分も行き詰りてある。この際において我等が深く耳を傾けねばならぬことは、仏世尊を除いて餘は能く救うことなけんという事である。特に現時日本の青年は最も同情すべき地位にあるのである。大いに修養もしている、されど安心が出来ぬのである。大いに理想も抱いている、されど実現することが出来ぬのである。大いに知識も持っている、されど如何に仂かすべきかを知らぬのである。大いに努力奮闘もしている、されどその効がないのである。而して最も同情すべきは道徳律法のために拘束されて、真心の自覚に接することの出来ぬことである。煩悶懊悩に陥りて、未だ絶対の光明に浴することが出来ぬことである。

今や我国においては心あるものは信仰を叫んでいる、されど其の信仰が果して如何なるものたるかを知るものは無い、如何なるものを信ずべきかに苦しんでいる。信ずるというは全体に如何にすることか分からぬのである。国法学者も根本を信仰に置かねばならぬということまでは気がついてある、されど其の信仰の根本を何れに置くべきかが不明である。国家の根本と宗教の本体とを同一物にしたらば頗る都合よきように考えられる。そこで古神道と名づけられたる新神道が盛んに唱説せらるるのである。我等は如何にも真面目な態度や、其のまごころの程も察せられて尊くも感ぜらるるのである。されどその結果は畢竟妥協に過ぎないのである。国家の根本に向って宗教的色彩や、情緒的渇仰を以て着色されたいというに過ぎずして、根本的に救

わるるということがないのである。妥協を以て一時を飾ることは出来ても、根本が救済されないのである。否、妥協を以て成り立ちたるものは必ず一面には矛盾撞着が来るのである。若し国家の根本が即宗教の本体なりと妥協している間はよけれども、我は宗教の本体は信ずれども、国家の根本を信仰せずというものを生じたならば、毛を吹いて疵を求むる結果となるのである。随分従来ありがちなる国体と宗教との衝突の如きは、寧ろ宗教の側において、宗教の本体と国家の根本と撞着するが如く考えた結果である。若し宗教の根本に於いて統轄支配という思想を有するなら必ず其の点において矛盾を生ずるのである。是我国の国家宗教の関係において、将来深く考えねばならぬ点である。

仏世尊を除いて餘は能く救うこと無けんというは、如何にも能く如来の救済を尽くしてあるのである。如来は無明長夜の燈炬である、人生救済の光明である。我等はこの智慧の光明に接して、初めて光暁を蒙るのである。信心の眼が開くのである。人生が分かるのである、広大勝解者となるのである。そこで上下の秩序も分かるのである。他人との関係も分かるのである。たとえば暗黒なる部屋も、電燈一たび閃きて天井の高さも分かるのである、床の卑きも知らるるのである。戸障子家具のそれぞれも分かれば、他人と衝突すべからざることも分かるのである。聖徳太子の篤敬三宝と教えたまうのは、世の光明である、人生の燈火である。一たびこの光明に接すれば、君は天たり、臣は地たりという秩序が明らかになり上下の礼も分かるのである。各人の道徳も人倫も、皆それぞれ踐むべき道が明らかになるのである。灯火と天井とを一つにせねばならぬということもない。又灯火と天井と撞着する筈はない。宗教にして国家と撞着するは、必ず灯火が天井の位置を犯さんとするからである、これ一歩も許すべからざる点である。国家を以て宗教を説かんとするは、天井が灯火の仕事をせんとするのである、是は不可能の事である。灯火を除いて餘は闇を破ることはないのである。室に灯火なければならぬ如く、世に仏ましまして我等が無明長夜を照したまいてこそ、初めて罪悪も自覚し、君恩国恩の偉大なることも分かるのである。如来は唯一の救済であるということが、決して国家に撞着することではない。唯一の救済に接してこそ信仰の智眼が開けて君恩国恩の広大なることを自覚せしめらるるのである。一向専修の信仰が、国家に撞着するものなくして、却ってこの信仰こそ人心の無明を破りて、国家人民の救済が持ち来たさるる次第である。

抑々一向専修の信仰と言えば、一見頗る偏狭なる態度の如く感じ安いが決してそうではない。勿論仏世尊を除いて餘は能く救うことが出来ぬというのであるから、仏世尊が

唯一の救済であることは疑う余地はない。何故というに先ず第一我等自身が闇黒であるから自ら救うことが出来ぬのである。我等自身が罪悪であるから、自ら清めることが出来ぬのである。而してたとい、かく行ずれば罪悪を消滅すべし、かく修すれば闇黒を去ることを得べしという教ありとするも、これを修することも、行ずることも出来ぬのであるから、とても救わるることが出来ぬのである。一向専修の根源は他を否定することではない、拒絶することではない。何れの行も及び難き身なれば地獄は一定すみかぞかし。是即現代における青年思想の行きつまりである。必ずしも弱きと退くべからず、彼等は無理なことを為して強かるべくあまりに弱いのである。必ずしも憶病として罵るべからず、彼等は理想を蹂躙して進むべく、あまりに憶病であるのである。いわんや微細なる点にまで気を配り、実行しても実行してもまだ足らぬまだ足らぬとばかり感ずるのである。竜樹菩薩の言を以て言えば、涅弱怯劣の菩薩である。自力の修業は難行道である。法然聖人も親鸞聖人も皆この一点に於いて苦しまれたのである。実に現代青年の深憂は是である。兎角戒律とか修行とか宗教的言語であるから了解に苦しむのであるが、畢竟するに修養とか、理想とか、努力とか奮闘とか、生きたいとか、徹底したいとかあせるまでが自力である、難行道である。その結果は煩悶である、懊悩である、狂乱である。実に現代青年の心ほど同情すべきものはない。

併し気強くも思い切りてこの際において現代青年に告げ知らすことは唯一である。汝の望むところは無効である、出来得ないのである。恰も不具者が完全なる人になりたいとあせる様なものである。危篤の病人が本復したいと慟哭する様なものである可哀想であるが出来ない望みである。親としては出来得るものならば完全なる人としてやりたいのである、本復させてやりたいのであるが、不可能である。併し此の如き不具なる汝を見はなすにあらず、危篤なる汝を独り去らしむるにあらず、汝の悲しみのあらん限り、共に悲しみ、汝の心細きかぎり、共に運命を同じうするのである。一面においては気強くも仏教は、罪悪無常の人生の如何ともすべからざること、又自力修行の無効なることを宣言すると共に、その罪悪のあらん限り、同情慈愛の光明を放ち、その無常の人生を救うべく常楽清浄の世界を実現したまいたるのが仏陀である。如何に微細なる点までも行き渡らざることなき、尽十方無碍の御慈悲である。如何なる闇黒の底下までも到らざること無き、無辺無際の光明である。そもそも親鸞聖人の真仏真土なるものは、仏はこれ尽十方無碍光如来、土はまた無量光明土なりである。報仏報土ということは、大慈大悲より酬報実現し来りたる

慈悲の塊、同情の結晶ということである。かく不具者、危篤の病人を如何なる点までも見捨てずして運命を同じうし、境遇を共にして救わずんば止まじという本願の下に報いあらわしたまいし如来なればこそ、報身如来と名づけたてまつるのである。此の如く我等は自己の力としては、自己のはからいとしては、一分も一厘も何れの行も及びがたき火宅無常の人生、煩悩具足の我身なれど、此の如く飽くまでも見捨てたまわぬ無量寿無量光の大悲の親の御心が、我等の心の底までも到りて下さるのである。真心徹到である。光明徹照である。この仏世尊を除き餘は能く救うものなけんというのである。この如来ならずんば能く救わるることないのである。大乗は二乗三乗あることなし、二つも三つもあるべからず、涅槃経の一道清浄も、華厳経の無碍道も、畢竟この如来清浄本願の念仏一道の外はないのである。是が仏法根源の帰依仏、帰依法、帰依僧である。聖徳太子の南無仏である。親鸞聖人の所謂念仏成仏是真宗であるのである。

涅槃経の中には阿闍世王のために、印度の六派哲学者が種々の法を説きて慰藉を与えんと試みつつあるのである。されど畢竟無効である。何となれば畢竟理窟に過ぎないのである、気休めに過ぎないのである。煩悶せなとすすめるのである、気をあせるなというのである。現代の青年が、誰が好みて煩悶するものがあろうか。かくせよ、かくせなという訓誡の如く実行出来るものならば、何故何時までも苦しむものがあるものか。この如き教訓律法は畢竟六師外道と何の選ぶ所もないのである。ひとり耆婆に至りては煩悶せなとは言わぬ、苦しむなとは言わぬ。王善いかな善いかな罪を作るといえども心重悔を生じて、而も慙愧を抱けり。苦しむも尤である、悲しむも無理ない事である。親鸞もこの不審ありつるに唯円房同じこころにてありけりというが、既に業に絶対同情の顕現である、耆婆が阿闍世王に同情するのが、既に仏の御心である。而して遂に阿闍世王が罪を犯して殺したる父ビンバシヤラ王が告げて言われたのが、「唯願わくば大王速かに仏の所に往ずべし、仏世尊を除いて餘は能く救うこと無けん、我今汝を愍むがゆえに相勧めて導くなり」と申されたのである。親鸞聖人がこの涅槃経の文の前に、「九十五種皆汚世、唯仏一道独清閑」という文字を引かれたのも、畢竟この意に外ならないのである。その清閑なる唯仏一道は、愚禿親鸞の如き愛欲の広海に沈み、名利の大山に迷惑するものを飽くまでも見捨てたまわぬ如来清浄本願である。難化難治の穢悪濁世の我等を矜哀憐愍したまう、大悲弘誓の醍醐の妙薬であるとすすめたまうのである。

近角先生著「親鸞聖人の信仰」②

（愛書と求道）

福島政雄

仏教の言葉で聖道門（しようどうもん）と浄土門（じようどもん）という。聖道門は自力修行の道であって、浄土門は他力信仰の道である。近角師は一仏名号という題の下に聖道門の徹底は到底不可能であり、浄土門の絶対他力に帰して始めて落着くことが出来るということを述べられる。

我等平素、難行道（なんぎょうどう）、易行道（いぎょうどう）とか、聖道門、浄土門とかいう名称は耳慣れているために、かえって殆んどその意味を感ぜざるが如くであるが、今これを新しき言辞をもって云い換えれば、律法主義と信仰主義といってよかろうこの二主義をもってすれば、今の聖道門、浄土門、難行道、易行道は云うに及ばず、古今のあらゆる宗教の大問題は皆ことごとくこの式で解決が出来る。

釈尊も修行時代には当時のバラモン教の宗義に従って、哲学をも学び苦行をも修し、色々と試みられたが、到底バラモンの律法主義では安心が出心ぬ。そこでそれらをすててニレンゼン河に浴して菩提樹下、金剛宝座に端坐して、心中より湧き出ずる解脱涅槃の妙味をもって成道せられたのである。従来の律法主義をすてて自己が信仰の妙味から説き出されたのが釈尊一代の教法である。

其の後、竜樹（りゆうじゆ）菩薩の難行道、易行道、道綽（どうしやく）禅師の聖道門浄土門、皆この経路がずうっと貫いてある。広く云えば仏教に二種ありて、一つには聖道門、二つには浄土門であると云い得るけれども、もう一つこれを極端に云うならば、この二門が相対的にならび立つものに非ず、聖道門はまことに尊き大聖の道なれども、それが律法的におちいったために釈尊の本意は唯絶対無限の仏の恵みを説いたので、つまり一仏名号に帰着するのである。換言すれば聖道門は仏教の真相にあらず、唯この念仏の信仰が真の仏法である。要するに一代仏教の真髄は如来の本願である。これが親鸞聖

人の腹である。

聖人がこの如く極端まで来ったのはそこに大なる理由がある。即ち二十年来、台嶺に在りて試み試みて終にこれを見出さざりし律法主義をすてて、法然上人の言下に他力信仰に入ったのである。

それであるから親鸞聖人は、師の法然上人が斯うなされたから、自分もこうせねばならぬと律法的に念仏を唱えたのではない。法然上人がこの如く念仏一つになって居られる所以は何の点にあるかということを全く実験的に味われたためである。親鸞聖人の実験それ自身が全く法然上人の実験と一致である。

法然上人は九歳の時、父時国が仇の為に殺されたのが動機となって仏門に入り、それより四十三歳にいたるまで多年の間行なえるだけ行い、一切経を五遍までも読んで種々修養を試みたが、如何にしても光を見出すことが出来なかった。最後において善導大師の観無量寿経の疏を読み「一心に専ら弥陀の名号を念じて、行往坐臥に、時節の久近を問わず、念々に捨てざるもの、これを正定の業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に」という文に当って、忽然として広大の霊光に触れて大安心を得られたのである。

法然上人は仏教の歴史上において、始めて専修念仏をとなえた人である。この念仏のために流罪にまで遭われたが、たとえ死刑に行なわれてもこの念仏は止めることは出来ないと、その決心は断乎たるものがあった。この法然上人の教えをそのとおり受けて少しも私意を加えず、ただ師教に従順なのが親鸞聖人である。その念仏の微妙な味わいを近角師は次のように懇切に説いて居られる。

念仏して往生するというのと、念仏した力で往生するというのと、僅かの相違であるようだが、その実は非常なる相違である。例えば親の命に従うて親の恩を喜ぶと、親の命令のままに仇くから親が色々と恵んで下さるのだというのとは、まことに幾微の間ではあるが、心に親の恵みを頂いて喜ぶのと、自分の仇きから親の恵みを彼是とはかろうとは、雲泥霄壌の相違であるが如くである。一筋に仏陀の恩恵を喜んで念仏する実験の味を親しく懇に教えられても、自分にこの信仰の実験の味がないならば空しく教語の未に拘泥して律法主義におちいってしまう。法然上人の一向専修の念仏の教えを親しく聞いたものがやはり美事なる独り立ちの念仏でなくて、なお諸行を捨てかねてかえって念仏に助行を加えている者のあるのは、皆この信仰の味がないからである。親が道楽をし

てはならぬというから道楽をせぬのだと云うておるならばまだそれはすこぶる危険である。真に親の恵みが思われるときは、道楽をせぬなどという如き余地のある云い方でなくして、如何にしても道楽の出来ぬのでなければならぬ。同じように念仏を主にしても、若しその念仏が仏の恵みを喜ぶ念仏でないならば、一たび捨てた諸行が再び復活して来る。それならば選択本願（せんじゃくほんがん）の念仏ではない。法然上人の念仏は一筋に仏の恵みを喜ぶ選択本願の念仏である。この仏願のままの教えを全く信じ全く受けられたのが親鸞聖人である。

聖人は「帰命とは本願招喚の勅命なり」とはっきり言っていられる。これが信仰問題の要処である。その信仰の内容を、徳号（とくごう）の慈父を能生（のうしょう）の因とし、光明の悲母を所生（しょしょう）の縁として、能所の因縁が和合するところに信心の業識がある。真実信の業識が内因であると云われる。これについて近角師は次のように云っていられる。

仏陀光明の照耀（しょうよう）によりて、漸くに導かれて信仰の門に入るが、いよいよ信仰に入りてのちは、また光明の照護によって信仰動退することなく終始一貫して極楽無為涅槃界に往生する。あだかも子が父母によって生れ、生れ出でては更にまた父母の愛護によって生育するが如くである。浅草報恩寺所蔵の聖人真筆の教行信証を拝するに、この光明名号因縁のところに沢山の雌黄を点じて大に注意を与えてある。これ実に聖人の実験的信仰の要所であるためである。

一仏の名号は仏の方から来るところの恵みである。南無阿弥陀仏というのは仏の方から、汝の親であるぞ、と自ら名乗って我々を喚（よ）びたまう声である。その名号を聖人は慈父と名づけられた。名号を慈父とまで喩（たと）えられたのは、聖人が一通りで仰せられたに非ず、それには大に味のあることである。

まず私の経験について案じまするに、自分がこの人生上に苦しんで、終に何処にも安んぜられず、世の中に真に自分に対して同情してくれるもの、真に恵みあるものはないかと求めても得ざる時の有様は、人の友を求め、孤児の親を求めて得ざる有様である。そこへ仏は悪しき者をめぐむ親なり、我等の父なりと光がさして来て、ここに南無阿弥陀仏の父に遇うたのである。そこで徳号の慈父と云われた。ただ漫然と父なりと喩えたのではない実験の味である。その具合は如何というに、心中が一つ開け、心中親に出遇うた心地が慈父というのである。

また一方に　光明の母ということも、つまり一念同時であるから、父母前後はなけれども、成る程、仏こそ我を恵む親とわかったとき、云うべからざる喜びである。即ち仏は慈悲の塊とわかった時、その仏とは即ち南無阿弥陀仏である。慈悲の塊とは光明の慈母の実験である。六字は仏の勅命の聞えた方とでも云おうか、光明の母とは懐かしき温かな光明の懐に摂められた味わいである。

「金剛堅固の信心は仏の相続より起る」で、常に相続して照らして下さる光明が、わが心の底に届いて、名号の意義をああ有難いという心が起ってきたという光明名号の因縁の味は信仰の一念の開発する当時の有様を味わうにあらずんば知り得ることが出来ぬ。

これは絶対と相対との連絡である。我々と仏陀との切っても切れぬ関係が宗教である。聖人は大行あり大信ありと言っておられるが、その大行大信は仏陀の光明名号の因縁から催されるところの仏陀の廻向である。

近角師はこのことを更に懇切に説かれ、聖人の和讃を引用して

「名号不思議の海水は　逆謗（ぎゃくほう）の屍骸（しがい）もとどまらず
　衆悪（しゅあく）の万川帰（き）しぬれば　功徳のうしおに一味なり」

と述べ、初一念の時、照破の利益を与えられし光明は、一生の間摂取し護念して下さるる光明であると言い、教行信証の行の巻の次の言葉を引用して居られる。

「然れば大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮びぬかば至徳（しとく）の風静に衆禍（しゅうか）の波転ず。即ち無明の闇を破し、速に無量光明土に到って大般涅槃（だいはつねはん）を証し、普賢（ふげん）の徳に遵（したが）うなり。」

このように常に念仏しつつ光明の懐へ入っての生活であると云い、この光明は八万四千の大光明であって、どうしても我等を捨てたまわぬ摂取の光明である。この信仰生活で未来の真実身を証するのであると結ばれている。

（昭和四十一年八月十八日稿了。人間の真理誌）

任田智見先生法語抄

一、聖徳太子は内外の苦しみを仏法で解決し、平和の本は三宝であると憲章に明示したまうた。

二、親鸞聖人は、見仏・聞法・度生が一生涯のお楽しみであった。

三、蓮如上人は八十五年の辛苦を、ただ信心一つに慰められて御満足の生活であった。

一道会の記

榊原徳草

まえがき

昨年の一道会の記は私の病気のため遂に筆記や録音を整理することが出来なくなって今日にいたり誠に申訳ないことであります。胃潰瘍という甚だお恥しい病気で、大阪医科大学に勤めている関係上、レントゲンや胃カメラなどあれこれと親切に診て貰いまして、入院せず自宅と通勤の中間療法で手術もせずに、今日まで服薬と食餌療法で過して、漸く良いようになっています。丁度一年になりましたが自覚症状がないので自分には判りません、いずれ最終の検査をして貰って落付きを得たいと思っております。老輩となり病に遭って、やまない愚痴が弥々微細綿密に走り廻ってお念仏一つに遭わせて頂いたことがまことに身に泌みて有難く感ぜられます。

それにつけても昨年は一道会の記を書き得なかった程、煩悩熾盛の身を知らされて、そのために誌友諸賢にあの法筵の様子をお知らせできなかったことを深く恥じ入ります、重ねて心からお詫びいたします。

今年は池山先師の第三十回の追憶の会であります。既に三十年の星霜を経ましたが、あの雪のチラチラ降る日に御葬式に集った皆の姿が目前に浮かびます。どこかで熱いうどんを皆集ってすすったことを思い出します。小さい声で何か話し合いましたが、もう先生に再び会えないことが胸の底にひしひしと迫って誰も取り止めのないことを場つなぎに小声で話しながら、大方は黙ってうどんを食べた時の悲しい気持が、今でも手にとるように、先生の常のお姿と一緒に髣髴として眼前に浮かんでまいります。

先生は亡くなられた、しかし、このお念仏を私に授けておいて下さった。あれから大事なお念仏を私一人で抱いてきた、先生のお念仏を大事に頂いたり、床の間に供えたりふところに入れてみたり、いろいろやってきた。そしてもう三十年も経ってしまって、自分の余生も何時とも期し難い老境に追いこまれた今日になると、先生から授かったお念仏も、私は私なりに自分だけのお念仏にならなければならないようになってきたが、そしてそれなりに我が身一つのお念仏というようにならされてしまったが、このお念仏、私なりのお念仏、これが私の身一杯の頂いたお念仏なのだが、いよいよ底の知れない深いお念仏が感じられてくる。浅い浅い、懈怠(けたい)の中の、私のお念仏に恥じる外はないが、どこまでもこの私につきまとって離し給わぬ大悲に謝す外はない。先生のお念仏をもう三十年も私一人で大事に大切に頂いてきたが、身についたお念仏はどれほどだろうか、お恥しいことである。

去年の一道会の記を書けなかったおわびとともに、今年の一道会の記を綴るにあたって感懐の一分を述べさせて頂きました。大方諸賢の御寛容をひたすらお願い致します。

○　○

十月二十九日、午后一時、もう開始の時間になる。すでにお昼前から見知らぬ方々が参られる、お弁当を頂いている方、じっと始まるのを待つ方、花田先生がまだ見えない参詣の人々が少い、白井先生は近くだのに姿が見えない、心があせってくる。先生の御写真の前には、四国の葛西さんと、横浜の森田さんからの御菓子がお供えしてある。名古屋からは参れないからと御供物料を送って下さってそれもお供えしてある。

そのうちに池山寿夫様その一族の方、御親族の藤井様の未亡人も東京から来られる。四国松山の岡寛一郎夫妻がみえる、さて続々と東京、四国、北陸と「各々十余ケ国の境を越えて」お念仏に遭いに「桧舞台にひき上げられて」集って来られる。見覚えのない方々が沢山来られる、参集約五、六十人であったろうか。

例年の如く阿弥陀経と、歎異鈔第十章までの奉誦を厳粛に一同でお勤めして先生の御忌日を偲び、御影前にお焼香を捧げる。

追憶のお話の前おきに私は先生をお訪ねした時の感懐の一端を述べる。次に白井先生のお話をうけたまる。その内容は大体次ぎのようであった。

〈白井先生〉

毎年この会にあわせて頂きますが、去年は故郷に帰ってお会いすることができませんでした。今年はさいわいにこの一道会にあうことができまして有難いことであります。

私は御生前の池山先生にはお会いすることができなかったのでありますが、池山先生の親しくして居られた近角先生に明治四十三年から大正八年までお導きを得ましたが、近角先生のお話の中に時々池山先生のお話が出てくるのでありました。その御縁が今におよんでいるのであります。

先生の名号碑が浄住寺に建立されましたが、私は週に一

度位は名号碑に参詣し「オネガイダカラ、スグキテオクレヨ」の先生のお言葉を聞いております。私は鈍感でありまして浄住寺さんは豊かな感情をもって強く喜んでおられるが、あのような感情の深い中から信心の消息が顕れていると思うのですが、感情の深いか浅いかは生れつきでどうすることも出来ませぬ、鈍い私は鈍い私としてお念仏を聞いております。

先日、鹿児島の御老人から手紙を頂きました、それに真宗の教と日常生活について尋ねられました。この方は自照誌の読者であります。あの雑誌に私の名が出ているので私に聞いてこられたのであります、その手紙に

「極楽往生のことは仏の他力で往生させて頂く、但しこの世の中は全力を尽して仏の仰せをまもって生きて行く往生は他力で、日常は自力でやっていく、これでよろしいか、おしえて下さい」

という意味の尋ねであります。

私はごく簡単なお返事を差上げました。只今読まれた歎異鈔第二章に「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せを蒙って信ずるほかに別の子細なきなり」とあります。これに連関して「ただ念仏して」と、「弥陀にたすけられまいらすべし」とは、どういう心持であるか。お念仏することで阿弥陀仏に助けられそれで極楽に往生させていただく、そう簡単に思うてよいのか、これでは念仏は極楽への条件のようになります、それだけでつきるのでありましょうか。

私にはあのお言葉をそのように聞くのは勿体ない気がするのであります。「ただ念仏して」とは、一声の念仏が出てくるそこに弥陀に助けられるのであって、念仏と生活と二つではないのであります。

「オネガイダカラ、スグキテオクレヨ」と呼んでいて下さる、近角先生は「やる瀬ないお慈悲一つ」と口癖のように云って下さる。そのお慈悲が根本に働いて下さるので、私など弥陀にたすけられる現在が出てくるのであります。その奥に慈悲が働いているので、往生は勿論、日常が矢張り仏の慈悲によって日常生活の根本の意味を知らされておるのであります。往生と現実とを二つに考えておるところに根本の間違いがあるように思われるのであります。やる瀬ないお慈悲を聞かせて頂く、それがのびていって往生極楽になると思います。

鹿児島のお老人への私の感想をお聴きいただいて、これで私の話を終らせていただきます。

次ぎに、池山寿夫先生のお話は次のようであります。

私は池山栄吉の長男であります。名古屋で暮しています今年は父の三十回忌ということで、今榊原さんから云われて知り、息子の私はうっかりしていたようなことで……。

私は父の二十八才の時の子でありますが、父よりもう二年も長生きしてしまい、早いもので、知らぬ間に年をとってしまいます。

父が亡くなった時、私はフト思ったものです、人生五十年を父もずうと越しているから天寿だろうと、遠く外国に離れていてそう思ったものでした。外国に居て父の死に駆けつけ得なかったけれども、人生五十年とははたの思いで、亡くなっていく父はきっと生きたかったろうと今になって泌々と憶うのであります。

念仏碑の前一面に盛りを過ぎた萩が一杯植えられていますが、父は萩が大好きで、家を引越すたびに萩を五株六株もって移り、萩一杯の庭を楽しんでいた父、年に一度のこの一道会は父の供養のためでないのは勿論ですが、私の生きるよすがを与えていただいて感謝する次第であります。

父は若い人が大好きでした、若い人に囲まれている父を思います。ここに沢山居られる若き日の親鸞会の人々、本当に父は若い人々に囲まれてお念仏する、岡山の時代から京都の晩年まで、そんな父を憶うことであります。

父は訪問客があっても黙って坐っていることが多かったのです。又訪ねてくる人もそうだった、黙って坐っている私は若い時、それを妙だなと思ったものです。十一時十二時までそれが続く、時折り「そうですな、全く」、「さようでございます、全く」、というつぶやきが聞えました。そこの席には眼に見えぬも一人(ひとり)、「一人居て喜ばば二人と思うべし、二人居て喜ばば三人と思うべし、その一人は親鸞ぞかし」その一人が居られたのです。人間の眼や耳のみでなく、耳に聞えない声、眼に見えない一人、その一人と対話していたのです。これが信の姿ではないでしょうか。眼で見たり、耳で聞いたりでなく、もっとのびた離れた世界の、その一人と、黙って坐って話している、聞いているそうした時をもっておりました。

父は訪ねる人が種々問題を持ってきても、善い悪いを云ったことをきいたことがありません。「ああそうですか」とじっと聞いて、大低は「歎異鈔をお読みなさい」と答えていました。

父は、与えた人ではない。その中の一人として弥陀のお慈悲を頂いて、皆もそこから頂いている、そういう父でした。父は所謂、あの「弟子一人も持たず」が実感でありました。人間の言葉で悲しみや苦しみが消えるものではない人間より他(ほか)にある、これが父の心であったようであります

私の母が死んでから父はよく私達五人の子供を前にして

「歎異鈔を読もうかね」と言ってよく読まされました。その時私は思ったのです、お父さんは少さい子供にこんな六ケ敷いものを読ませて何になるのだろうか、お父さんが解らない、と。只今榊原先生が拝読されたのは第十章までですが、あれから後の八章と後序は可成り長い、その全部を読むには四十分から五十分はかゝります。その父の心がわかったのは敗戦後でした。私は開戦とともに、交換船でペルーから送還されて日本に帰りましたが、敗戦の時、感ずるところがありまして四国の高知の山奥で開拓者生活に入りました。そこでは食物の自給自足は出来ますが金銭に不自由しました。そこで開拓した畑で作った大根や人参を、牛の背に縛りつけて売りに行くのですが、仲々それが六ケ敷い、縛りつけてもすぐ落ちる、やっと荷造りして二里ばかりの山路を越えて町に売りに行きました。そうした時種々と考えさせられましたが、これでいいんだ、と思いました。その当時三人の子供がありました、彼等も長い人生の旅路には、どんな破局に打ちあたるか知れないが人生の悲劇に遭うたとき、父が牛に大根や人参をつけて売りに行く姿を思い浮かべてくれれば、自分の今の生活も無意義ではあるまい、きっとそうした時、立ちあがる力になると思いました。

その時、父が「歎異鈔」を読ませたこころがわかったのです。父は私等五人に「歎異鈔があるんだよ——私は何もお前達に残さない、これだけだよ」と。父は母の亡いあと、子供達に歎異鈔を焼きつけておきたかったのだと。年が経つにつれて、この父の心がこたえて参ります。

今では父より長生きした私ですが、我ながらあきれる生活でありますけれど、眼には見えませんが、も一人の他の人に抱かれた時、柔和忍辱（にゅうわにんにく）、広々とした心にならされます。これは或る意味では強い心、たとえば人にあやまるには一番強い心がいりますが、ことに妻にあやまることは一番強い心がいりますが、ところが膝に私を抱いて下さるお方があると済みません、済まなかったと一言出るのはそのおかげさまでありましょう。

今日は、父と歎異鈔を拝読した、少年の時を思い出した次第であります。

続いて花田先生のお話。

今池山寿夫様が、「あらゆる問題をじっと聞きとられた池山先生が、歎異鈔を読みなさいとお勧め下さった」と仰言いましたが、それについて思い出しますことがあります。今名古屋に居る信友の高山さんが、大谷大学の学生だった頃、ノイローゼ気味になって大変苦しまれた時、池山先生を蓮華谷のお宅におたずねして、苦衷を訴えると、先

生はお念仏しておられて、「君の苦しみを私はどうしてあげようもない、私もお念仏にたすけられているから、君もお念仏にたすけられなさい……」とだけ答えられた。その時はあてはずれのような、たよりない気持がしたけれど、人間としての先生が姿を消されて、本当に私共をあわれんで下さる御方をジカに指して下さったことはありがたいことであったと今にして深く味うていられます。

私自身も、岡山の学生の頃、先生が住吉から久々に岡山に来られたので御目にかかって、当時の愚痴を申したことがあります。その時先生は「種々と聞いたが、人それぞれに性格も環境も違うので、君のことを思ってみても、靴の上から痒いところをかくような域を出られない」と仰言って、あとは、歎異鈔のお話をはじめられました思い浮かぶままに申しました。

さて、大正の頃に池山先生が著して下さったドイツ語の歎異鈔を、現在ベルリンの浄土協会の方々が非常に大切に読んでいるとのことをピーパー氏からききました。或若い医師は毎夜枕頭において一章づつ繰り読みし、或信者は何か人生問題に行きつまると歎異鈔を読んでそのおしえをうけている、ピーパー氏自身は毎日読んで日々に何か新しいものを教えられているが、おそらく死ぬる日まで毎日続けるでしょう、と喜んでいます。ベルリンは明治三十年頃に近角先生、美濃部氏、園田師、巌谷氏、吉田静致氏、等々が池山先生と共に「花祭り」をはじめて催された土地でありますがその花祭りは今もなお続いている由であります。因縁の遠く深いことを知らされます。

次に、聖徳太子が十七憲法の第七に「事（こと）大と小と無く、人を得て必ず治（おさ）まり、時急（とき）と緩（ゆるき）と無く、賢に遇うて自ら寛（ゆたか）なり、此に因って国家永く久しくして社稷（いえ）危きことなし」とあり、この「賢（けん）に遇（お）うておのずから寛なり」の一句を思うにつけ池山先生が終生指して下さったこの歎異鈔によって、賢に遇うよろこびを私共に味わわされるのであります。ドイツの信の友もこれを喜んでくれております、先生の御霊前でおき頂きたかったことであります。

もう一つ。これはある方が病院で静養ときいてお見舞いしますと、ドイツ語訳歎異鈔を持っていられて、久々で夜明けの一時、ゆっくりと味読させて貰い今まで気付かなかったことを教えられましたと云われたのちに、しかし十一章以下はどうも有難く読めませんが、どうでしょうかとのことでありました。

それで申しましたことは、私も長い年月、あなたと同じことでありましたが、フトしたことで、十一章以下のことについて眼を開かれました。それは敗戦後、米人宣教師が

「仏教は消極的で、偶像崇拝の教で駄目」と言っていると聞きました時、腹が立ちまして、消極のない積極は猪武者であり、偶像偶像というキリスト教だって十字架を拝んでいるではないか？と心の拳があがったのであります。その時、歎章鈔十二章の「わが宗こそすぐれたれ、ひとの宗は劣りなり……かえりてわが法を破謗するにあらずや」の御文が浮び、振りあげられた拳も漸々にやわらげられ、念仏にかえりますと共に、宣教師の人もまた自分も教をひろめているつもりで実はさまたげをしているんだね、それに腹立てる私と五分と五分なんだと知らされ冷汗が流れました

また、母の老病が段々重くなった頃、旅先で烏の鳴く声に耳をそばだてて、烏の鳴き声をきくと近親に不幸がある、といった幼い時に聞いた迷信がフト心をとらえました。それにつけても、万物の霊長だと平素は威張っている人間が烏の鳴き声にびくづくとは、と我が身の愚鈍さが知らされその迷い心は消されました。念仏門に入って数十年も経って、すでに迷信からは解放されているはずの私が、心の底の何処かに残っていて、縁にふれては出てくるのに驚くと共に、歎異鈔十五章に「おおよそ今生において煩悩悪障を断ぜんこと極めてありがたきあいだ云々、弥陀の願船に乗じて生死の苦海を渡り報土の岸につきぬるものならば、煩悩の黒雲はやく晴れ法性の覚月すみやかにあらわれて尽十方の無碍の光明に一味にして一切の生を利益せんときにこそさとりにては候え。云々」の御文も、この私のためにあつたと知らされました。

以上のように、歎異鈔の十一章以下の「異」の姿は、当時の人々の誤りで、けしからんことだというように他人事にしておりましたことが、実は私自身のことであったと教えられはじめて以来、今まで軽く読んでいたことを愧じ入ったことですと答えました。

唯円大徳の異なる者を歎ずる心は善悪沙汰の裁きではなくて異解者を自分のこととして、その者を歎き悲しんで下さる、大悲の発露であります。こんなことを最近味わわせて頂いておりますが、皆様の御叱声をお願いするのであります。

人生浮世間

良　寛

人生浮世間
忽如陌上塵
朝為少年子
薄暮作霜鬢
都為心不了
永劫枉苦辛
為問三界子
何以為玄津

人生はまことに浮世の間である
忽ち変り行く事は陌上の塵埃のようだ
朝にはいとしい美少年も
薄暮には知らず霜は雙鬢に降るを
おしなべて、この心をさとらないから
永劫われからと枉げて苦しむのである
為に問う三界に迷えるものよ
何を以て彼岸への玄津とするか

求道の扉

花田正夫

学生の頃、華厳経のことについて聞きましたことは、この経は釈尊の成道された広大無辺な心の内面であるが、これを聞く舎利弗や日蓮の如き声聞（しょうもん）のさとりを得た者には、チンプンカンプンで、聾（つんぼ）や唖（おし）同然であった、ということであります。

それを聞いてから、自分はまだ声聞や縁覚のさとりはもとよりのこと、何一つさとれない泥凡夫であるから、この華厳経などには縁のない衆生である、とひとり合点して長らく心を塞しておりました。

ところが、大無量寿経のはじめに、法蔵菩薩が世自在王仏の御徳を讃仰されて。

光顔巍々として威神きわまりなくまします。
かくの如きの焔明ともに等しきものなし
日・月・摩尼珠の光の焔耀も、みな悉く隠蔽せられて
なおし聚墨（すみのかたまり）のごとし。

とありますのに非常に心うたれました。法蔵菩薩御自身が、仏徳に照らされて、すっかりひかりを失っていられる。言葉をかえて申せば、何ひとつたのむべきもののない身と自照していられる点に括目させられました。

ついで菩薩が浄土建立の本願をおこされて、世自在王仏に諸仏の浄土のことをおたずねになると、「汝自らまさに知るべし（汝自当知）」と仰言る。すると菩薩は「わが境界でありません（非我境界）」とおこたえになって、お教を乞うておられます。

ここに、先ず謙虚な求道の姿を教えられますと共に、浄土の祖師達がみんなそこを出発点としていられる事実に驚きました。源信僧部が「余が如き頑魯（がんろ）の者」、源空上人が「十悪、愚痴の法然房」、親鸞聖人が「愚禿（ぐとく）親鸞」と自照されて、そこから浄土の門が開かれているのであります。

以上のことを知らされまして、再び「聾の如し、唖の如し」の聖語に着目しました時、ああそうか、と大いにうな

ずかされました。それは広大無辺の仏心界は、我かしこし我よしと思いあがっている人には塞ざされて永遠に開くことは出来ないが、そうした自身は聾であった唖であったと気づかされるところからその扉が向うからひらけはじめるということであります。こうしたことから華厳経にしたしみはじめました。ことに福島先生のお味わいに導かれました。

華厳経の最後の入法界品（にゅうほつかいぼん）には、成道の釈尊の永遠の求道魂の象徴と申すべき、善財求道の姿が詳しく説かれていますが、その求道の出発点で童子は文殊菩薩をたずねて教えを聞いて、そこで次のように告白しております。

愛水深濬為池塹　只今の私は愛欲の水が深く、それで自分の囲りに池をめぐらしております
高慢高挙為垣牆　高ぶる心があって身の囲りに垣を作って人をへだてております
諸出趣入為門戸　諸の迷いの世界に入る門戸になっているようなものでありまして
三有難超作城廓　三つの迷いの世界を超越することが仲々むつかしく、その城廓の中に閉じこめられています
愚痴闇無明常所覆　愚痴にとざされ、無明の闇が常に私に覆いかぶさっております
貪恚熾盛火恒焼　むさぼりいかりの心が常におこって火がいつも焼いているようであります
魔王自在処其中　悪魔の王というものが自由自在にその中におりまして
愚童凡夫依止住　私は愚かな若者、凡夫としてここに止まっているような次第であります
諂誑忿恨惑乱戯　へつらい、たぶらかし、いかり、うらむというこころが乱れおこっております
貪欲所纏如縛索　その根本は貪欲にまつわり繋がれておるようなものであります
疑惑所蔽若生盲　疑いの心を持っていて、それが私を蔽いかぶさっていて生盲のようであります
恒行険趣諸邪道　始終間違った、あぶない邪道を歩んでおります
常為慳嫉之所縛　それに物おしみしたり、ねたんだりする心にも縛られております
入於三塗八難中　それですから所謂、地獄、餓鬼、畜生の三途（さんず）の八つの苦難の中におちており
五趣輪廻不覚知　五つの迷いの世界をめぐって私自身知ら

ずにおるような有様であります
恒受生老病死苦　そこに生老病死の苦しみがつねに私にせまっております、私はこの通りであります。
滅惑大悲清浄日　こう云う惑いをほろぼして下さる大悲の仏様、清らかな日のようなお方、
智光普照円満輪　その智慧の光はあまねく照らし給う円満なお方であります
能竭生死煩悩海　この生死の煩悩の海をすっかりほしつくして下さるお方であります
願降慈光少観察　どうぞその慈悲の光を降らしてくださって現実の私の姿を御照覧下さいませ

さて文殊とは、仏陀の智慧をあらわされる方でありますが、善財童子が、その仏智を仰いで、そこにおのずから自分の姿が照らし出され、そのままを以上のように告白しており、これから永遠の求道がはじまるのであります。

私はフランス語に歎異鈔を訳された山田宰さんからその序文をたのまれました時、最初に書きましたのは
「この書を読むとき、自分は智慧がある、よいところもあると、自分をたのんでいる人には、この真の宝の蔵は堅く塞ざされてしまうが、智慧の眼は盲い、修行の足は無力であると気づく人には、一言一句その者のために光とあたたかみをもってひびいてくる云々」
の一事でありました。

又これは私が大連の別院に居た頃でしたが、或朝、勤行を終えて自室に帰ると、増山銀治さんがたずねて来て
「あなたは今おつとめしておられましたが、本当に仏前で頭がさがりますか？」
と問うのです。そこで
「僕は僧侶になっているが、妙なことを聞くね」
と問いかえすと
「いや他ではありません。僕はどうしても頭がさがらぬのです、木でつくり、金でつくった仏像の前に。そこでおたずねするのです」
とのことで、
「それならよくわかった。手みじかに答えよう。世間にも猫に小判、豚に真珠というが、猫や豚には小判も真珠も石ころ同様なので、魚の臓物や、残飯の方がよい」と云うと、増山さんは頭をかいて、
「ひどいことを云われました。畜生同様とは……」
そこで重ねて私は申しました。

「いや、打ち明けて云えば、僕もはじめは何でもわかるとうぬぼれていたが、仏法を聞かせて貰うと、猫や豚の智慧しかないと知らされはじめたのです。君もはやくそこに気づいて貰いたいのです。そして自分がそのように愚鈍であると知れはじめると、法然上人も愚痴の法然房と申され、親鸞聖人も愚禿親鸞といわれて、そこにその姿をあらわして下さるのです。」

すると増山さんは

「先生はまず愚者に帰れといわれるのですか。世間では賢くなれ、善くなれとばかり教えるのですが？これはしっかり考えねばなりません」

それから毎日のように時間があると増山さんは私の部屋に来て、愚問愚答をくりかえしておりました。ところがそれから何日かあと、或朝早く、私は叩きおこされました。

「先生おきて下さい。先生は猫だといわれましたが僕は犬でした、そこを一ぺん聞いて下さい」

と大元気で顔を見せました。よく聞きますと、その朝増山さんは心に面白くないことがあったので、平素好きなラスという支那犬を呼ぶと、飛んで来たのですが、脚に傷をして血を流しビッコをひいていました。水道できれいに洗って薬をつけてやると、その薬が傷口を刺戟したので、驚いた犬が、ワンと叫んで増山さんにかみついたのです。その刹那、腹立ちまぎれに思わず「ド畜生！」と拳で犬をしたたか叩くと、犬はしっ尾をまいて、キャンキャンと叫びながら遠ざかって行きました。その瞬間です、自分は犬と同じ智慧しかないなあ！と知れましたのは。犬に薬のことなどわかろうはずがありません、ただ痛いので驚いてかみついたのです、それなのに、ド畜生！と腹を立てる私は犬と同じ智慧でした、と感銘深い話をしてくれました。

それからは増山さんは仏書にしたしみ、仏前にひざまずくようになり、大切に念仏の一道を辿る人となりました。

西田幾多郎先生は

「親鸞聖人が在世の時自ら愚禿と称し、この二字に重きを置かれたという話を思い出て、余の知るところをもって推するに、愚禿の二字は能く聖人の人となりをあらわすと共に、真宗の教義を標榜し、かねて宗教そのものの本質を示すものではなかろうか。人間には智者もあり、愚者もあり、徳者もあり、不徳者もある。しかし如何に大きくとも人間の智は人間の智であり、人間の徳は人間の徳である。三角形の辺はいかに長くともすべての角の和が二直角に等しいというには何の変りもなかろう。ただ翻身一回、この智、この徳を捨てたところにおいて新なる智を得、新なる徳をそなえ、新なる生命に入ることが出来るのである。これが宗教の真髄である。

……右のように云えば、愚禿の二字はひとり真宗に限ったわけでもないようであるが、真宗はとくにこの方面に着目した宗教である。愚人、悪人を正機とした宗教である。同じく愛を主とした他力宗であっても、ユダヤ教から出たキリスト教はなお正義の観念が強く、いくらか罪を責めるという趣があるが、真宗はこれと違い、絶対的愛、絶対的他力の宗教である。例の窮子（放蕩息子）をむかえた長者の父のように、いかなる愚人、いかなる悪人に対しても弥陀仏は、ただ汝のために粉骨砕身せりと云って、これを迎えられるのが真宗の本旨である。歎異鈔の中に「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」といわれたのがその極意を示したものであろう。

終りに宗祖その人の人格について見ても、かの日蓮上人が意気冲天、他宗を罵倒し、北条氏を目して、小島の主等が云々と壮語せしにくらべて、吉水一門（法然上人の念仏の一門）の奇禍につらなり北国の隅に流されながら「若し我配所におもむかずんば何によりてか辺鄙の群類を化せん」といって、法を見て人を見なかった親鸞聖人の人格はすこぶる趣をことにしたものと云わねばならぬ。風号び雲走り、怒濤朝天の間に立ちて、動かざることと厳の如き日蓮上人の意気は壮なることは壮であるが、煙波茫渺、風静に波動かざる親鸞聖人の胸懐はまたなんとなく奥床しいではないか。」

と、親鸞聖人の愚禿のこころにひらけた真宗の面目を讃仰していられます。

ひそかに思いますのに、弥陀、釈迦二尊の求道にひらけて三国七高僧の上に建現し、さらに親鸞聖人の上に照りかがやく信の荘厳さ！さいわいに聖人の御導きをこうむって・人生のいたるところ、順境にいましめを、逆境に安慰を、病床にやすらぎを、等々善悪をこえて無碍の光明の照護をいただき得ますことは、何たるよろこびでありましょうか。ここに求道の扉は永遠にひらけるのであります。

尋春の賦

尽日尋春不見春　一日中春を求めて尋ね廻ったけれど、
芒鞋踏遍隴頭雲　草鞋ばきで雲のかかったはるかな岳や
帰来笑捻梅花嗅　山をあまねく歩いたけれど。
春満枝頭已充分　やむなく家に帰ってくつろいで庭先に
　咲いた梅の香りを嗅ぐと
　その枝頭に春色はみちみちてあますところがない。

法味一束

聚墨生

（一）

去月、北海道の美唄炭鉱のガス爆発で十六名の犠牲者が出ましたが、同所の初代所長の近角真観様の御心痛はいかばかりかと、オロオロしながら遙察申しておりました。

思えば、数年前の洞爺丸沈没の惨事の時、急いで救援に赴かれた時の実状の記録を「慈光」に頂きましたが、あの時、身をあげて悲しまれた真観様とて、今回の御心事、察するにあまりがあります。

そうしました時、二月五日附の御書信を頂きました。その中に次の一文がありました。

「二重、三重の安全のハドメも、偶発原因が重なると恐ろしいことがおこります。歎異鈔十三章の『また害せじとおもうとも百人千人をころすこともあるべし、とおおせのそうらいし……』の御聖訓、今こそ知らされました。二河白道でやらしてもらっております」

と。本当にありがたくくりかえし読ませて頂きました。

池山先生があるとき「心くらく、人生の岐路に立つとき歎異鈔の何処かがあらわれて、道をひらいてもらえる」と語られたことも思いあわせられました。

（二）

二月十二日附の福島先生の御書信に、

「……二男昭雄の十三年九ケ月の入院加療、その間には色々の面白くないこともございましたが、それを乗りきって退院にまで漕ぎつけました。本人の辛抱強さもございます。私は家内の熱意に励まされて十三年間ほとんど毎日病院に通いました。看護人も善い人もあり、ひどく悪い人もありました。忍耐以てその間に処して参りました。本人の苦労は大したものでございました……。

帰り来ぬ十三年と九ケ月の療養終えて吾子帰り来ぬ
百年も経し心地しぬ吾子を待つ十三年の父母の心は
退院の吾子を迎えて父母の悩みの心和らぎにけり」

とありました。

昨年、法華経とルカ伝を照合せられまして、「蕩児帰る」と「長者窮子」の譬のこころを福島先生からおききしたばかりでありますが、今回は、そのままの御体験をおしらせ下さいました。

（三）

一月に、名古屋大学の上田教授の停年退官の最終記念講

義の案内をうけまして、昔の学生に帰った気持になってお聴きいたしました。

大綱を申しますと、最近日本でやかましく伝えられているルース・ベネジットの著書についての批判でありました。

そこに世界の文化の型に、罪の文化と、羞の文化があると云い、罪の文化は内面的良心による文化であるが、羞の文化は、世間的外面的であるとして、日本の文化は、羞の文化で罪の意識がすくないと「菊と刀」のなかに書いている。羞だけが問題となると、羞の告白はその人に重荷となり、人に知られて苦しむばかりである。そして悪の問題を認めることを捨てて、こばみ続けている、と評しているがこれは日本人として承認出来ない。

日本人の「おはずかしい」という言葉は、単にそうした表面的なものではない。親鸞聖人は、教行信証の中に、涅槃経を引用されて

「二つの白法あり、よく衆生をたすく。一つには慚、二つには愧なり。慚はみずから罪をつくらず、愧は他をしてなさしめず。慚は内にみずから羞恥す、愧は発露してひとにむかう。慚は人にはず、愧は天にはず。これを慚愧となづく。慚愧なきものはなづけて人とせず、なづけて畜生とす。……」

又、聖人の和讃に

「浄土真宗に帰すれども　真宗の心はありがたし
虚仮不実のわが身にて　清浄の心もさらになし
外儀のすがたはひとごとに賢善精進現ぜしむ
貪瞋邪偽多きゆえ　奸詐ももはし身にみてり
悪性さらにやめがたし　こころは蛇蝎のごときなり」

こうした心は、ポーロのロマ書とくらべて見ても、より深いものがある。

こういうと聖人は特別な人と思うかもしれぬが、所謂文字も知らず、財産もない庶民の中に妙好人があちらこちらに出ていて「おはずかしい、ありがたい」という生活をしている。このような人が出るには、その人を育て、うるおした大きな背景がある。ベネジットは、この日本の外面だけを見て評している、外国人が日本人を見るときの盲点におちていると思う。

以上は仏教が長年日本にうるおうた結果であるが、又儒教も日本人の中にとけている、その中にも「ひとりをつつしむ」というおしえもあるので、日本人はもっと自分の国を知らねばならぬと思う。いたずらに外国人が「日本人はこうだ」と云うと、日本人がそれに感心して、自分を忘れるようなことではいけない云々。

ジャータカ物語

（一）樹神の叱り

遠い遠い前の世で、お釈迦様がおいしい果実のなるジャンブ樹の林の樹神として生れていらせられた時のことであります。

その樹の枝の一羽の烏がとまってジャンブの実を食べておりました。そこへ一匹の豺（さい）がやって来て上をながめて、若しあの烏めにありもせぬ徳を賞めてやればおいしい果実をくれるだろう、と思い、次のようなへつらいの歌をうたいました。

玉のごとき美しき声をもち
いともすぐれしさえずり手
いつもジャンブの樹枝にある
うら若き孔雀の如き彼は誰ぞ

これをきいた烏は愚かにもいい気になって、又お世辞でこたえました。

良家の子等をたたえうる
汝は良家の出生（いで）ならん
若き虎ともたとうべし

友よ、捧げんものを食めよかし。

こう云いながら枝を動かして果実を落としてやりました。樹神は、このようにお互にありもせぬ徳を賞めたたえて心にも無いへつらいを言い合って果実を食べている有様を見て、おそろしい形相を示して、次のように彼等を叱っつて追い払われました。

虚言者達のあつまるを、
我の久しく見るところなり
屍物を食う烏と、肉を食う豺と
たがいに賞めて讃うなる。

（二）病に教えられた賢人

はるかなる遠い前の世のことであります。印度のハラナという国に一人の智慧すぐれた賢人が家庭を持って住んでおりました。ある時、大変重い病気にかかり治療に手を尽くしましたが何のききめもなく、医師さえも匙（さじ）を

投げるにいたりました。そして彼の身体は塵の中で燃える太陽に照らされた花のように、刻一刻となえはてていき、妻や子も歎きに沈んでおりました。

そうした中で彼は思いますのに「若しもこの重病から再び立ちあがることが出来たなら、私は出家して一途に真実の道を求めて行こう」と。

はからずも遂に九死に一生を得て全快することが出来ましたので、ヒマラヤの山中にこもり修行を続けてさとりの境界に達することが出来ました。そして

「長い間私はこのような楽しみを知らずにいた」

とて歓びの歌をうたいました。

わたしは今まで物質のよろこびに満たされて
まことは不快なことをこころよいことのように思いこみ
不浄なものを、きよらかなと思っていた。

恥しいことよ、この身は汚れたるもの、厭うべきもの
何時病にほろびるかはかり知れない無常なもの、

このままで懈怠に身をまかせるならば
とこしへに闇に迷うて行くばかり。

（三）肉をおとした鷹

一羽の鷹が、ある空店から一片の肉をさらって空中に飛び立ちました。するとこれを他の沢山の鷹が取り巻いて、爪や嘴などで突きかかっていったので、彼はその苦しみに堪えられないで肉片を落としてしまいました。

すると他の一羽がそれを取ったが、彼もまた同じように苦しめられてそれを落としました。又他の鷹が取り、そして責めたてられては落としました。それをとるものがある毎にそれを他の鷹が追うて行き、肉片を落したものは、それで楽になりました。

菩薩はこれを見て「この欲というものは肉片にたとへるべきものである。これに執着するものは苦しみ、これを棄てたものは楽しい」と仰せられました。

盤珪国師の警策歌

としはよれども心はよらじ、いつも変らぬこの心
我と造れる心の鬼が、責めて苦しむ身のとがを
嬉し芽出度や老いせぬ君に、尋ねあうたり我ひとり
よきもあしきも一つにまるめ、紙につつんで捨てておけ
悪を嫌うを善じゃと思う、嫌う心が悪じゃもの

あとがき

「春乾坤にめぐりきて」と若い日におぼえた歌の一句がおもわず口に出る頃となりました。春衣にかえた人々の嬉々とした姿が街に野にあふれております。

それにひきかえ、毎日報道されるベトナムの戦禍、あわせて朝鮮の緊張、すでに日本もその渦中にあると申す外はありません。

この時、近角先生の「仏世尊を除きて餘は能く救うこと無けん」の一文は、大正のはじめに述べられたものでありますが、一人一人よく味読させていただきましょう。道は一つであります、二つも三つもあるはずはありません、あれもよいこれもよいといっているのは、宗教の見物人、傍観者の言葉であります。しかもその道は、私共の根機に相応した道、たすかるべからざる者の救いを成就して下さる仏願ひとつであります。

福島先生の「親鸞聖人の信仰」の読破録とも申すべき第二回目の原稿を頂きました。数年後には求道会館から、近角先生の御著書が出版せられますことと期待申し上げておりますが、それにさき立って福島先生の御解説を頂けますことはありがたいことであります。先生も本年は満七十九才を迎えられましたが、御病気もなく何よりとおよろこび申上げております。

昨秋の一道会の記をお忙しい中から榊原さんのお骨折りによっていただきました。一昨年は榊原さんの四大不調のため御原稿が頂けなかったので、皆様からおたずねをうけましたが、今回は二回に分けていただきました。年々この集いを、この上もない行事として榊原御夫妻がいそいそとお準備下さいますお蔭で、皆々たのしみにして待っております。また白井先生は、御忙しいのに日程をおつくり下さって特別の御用事のおありでない限り御出席下され、法味をお頒ち下さいますこともありがたいことであります。四国の岡さん、東京の桑田さんと藤井夫人、福井の加茂さん、岡山の山根さん、三重の渡辺さん、名古屋の方々、遠地からのお参会に一層心うたれるものがありました。

おことわり

◎二月末から膀胱に腫瘍が出来ましてその手当を続けて居りますので、三月と四月一杯を講話を休ませて頂きます。五月頃には元気でお目にかかれると存じます。

花田

定価　半年　二百五十円（送共）
一年　五百円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　本田政雄
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番

慈光　第二十巻　第七号　昭和四十三年三月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可